

令和 2 年 7 月 3 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02917

研究課題名(和文) 演繹的分析法と意識・逐語訳ダブル対訳コーパスによる助詞デの英訳のしかたの研究

研究課題名(英文) A study on how to translate Japanese "de" nominals into English

研究代表者

加藤 鉦三 (KATO, Kozo)

信州大学・学術研究院総合人間科学系・教授

研究者番号：20169501

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、デ格名詞句とその英訳版に現れる対応箇所とを比べてみるという作業をした。研究期間中に得た成果で主なものは次の3点である。(1)日本語原文に明確な動作主がない時、プロの翻訳家はデ格の主語化という方策を用いる。これは、日本語は副詞優位であるからデ格が多用されるからである。(2)「会議」のようなデ格デキゴト名詞を時間表現で使う場合、デキゴトを期間として見る時にはduringを使い、期間として見ない時には、デキゴトがある程度長く続くならinを使い、そうでない単体のイベントならatを使う。(3)「デは最終手段としての格助詞(他の格助詞が当てはまらないものは全部デで表す)」である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英語には少なからぬ数の前置詞があるが、日本語で格助詞は限られており、特にデは二・カラ・マデに比べて非常に守備範囲が広く、デは二・カラ・マデがカバーしない意味関係を一手に引き受けている。従って、日本語を英語にする時には、デに対してどういう英語表現を当てるのが難しい。そのため、日本語社説文に現れる名詞+デをその英語版でどう訳しているかを調査した本研究の成果は、英語教育現場や日本語をベースとして英文を作っていく作業において役立つことが期待できる。

研究成果の概要(英文)：We have studied how Japanese "de" nominals are translated in the English edition of a newspaper's editorials. We have found the following. (1) If there is a "de" nominal but no agentive subject in a Japanese sentence, then the "de" nominal is converted to the subject in the English sentence. This comes from the fact that adverbials (like "de" nominals) are more often and more easily used in Japanese than in English. (2) Event nominals like "kaigi" (meeting) with "de" are translated using "during" if the event is regarded as a time period, using "in" when the event has some time length, and using "at" otherwise. (3) "de" is a last-resort Case marker; "de" is used when other Case makers are unavailable.

研究分野：英語学

キーワード：格助詞 前置詞 デ格

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

助詞デの用法に関する研究はもちろん数多くあり、また英語の前置詞に関する研究も、申請者の研究も含めて、当然数多くある。しかし、助詞デだけに特化して、それが英語でどのような表現に訳されるか、またどうしてそのような訳が選択されるのか、に関する研究は、管見の限りなされていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は次の2点である。(1)日本語の助詞デを英語にどう訳すのかを、文の動作とデ格名詞を意味的に分類することで機械的に翻訳できるよう分析する。(2)その分析の元となる日本語文(新聞社説)とその英訳を収集し、分類し、それを分析編と意識・逐語訳ダブル対訳コーパス編の2部からなる『デの訳し方辞典』として報告書にまとめる。

3. 研究の方法

読売新聞社説に見られるデ格がその英訳版でどのように訳されているかを分類し、分析する。

4. 研究成果

研究期間中に得た成果で主なものは次の3点である。

(1)日本語原文に明確な動作主がない時、プロの翻訳家はデ格の主語化という方策を用いる。これは、日本語は副詞優位であるからデ格が多用されるからである。

■「手段」のデ

2016_4_2 政策的な支援で、前向きな企業の背中を押すことも大事だ。

Policy assistance is also important to give forward-looking firms a supportive push.

逐語訳 It is also important to give forward-looking firms a supportive push with policy assistance.

2016_7_8 公的制度で対応できない部分を地域共生社会によって補う方向性は妥当だろう。

We can say the idea of making up for services that public programs cannot provide by building up a community-based symbiotic society is a step in the right direction.

逐語訳 ... services that they cannot provide with public programs

■イベント・機会のデ

2016_4_6 国会では、国際競争力を高める具体策について、話し合ってもらいたい。

We hope the Diet will discuss concrete measures to help enhance the international competitiveness of the agricultural sector.

逐語訳 Deliberations have begun in the Diet on how to help enhance the international competitiveness of the agricultural sector.

■場所

2016_4_7 首都圏の私大では、地方出身者らを対象に給付型奨学金を設けているケースもある。

Some private universities in the Tokyo metropolitan area have established a grant-in-aid scholarship program for students who come from non-metropolitan areas.

逐語訳 At private universities in the greater Tokyo area, they have established a grant-in-aid scholarship program for students who come from non-metropolitan areas.

(2)「会議」のようなデ格デキゴト名詞を時間表現で使う場合、デキゴトを期間として見る時には during を使い、期間として見ない時には、デキゴトがある程度長く続くなら in を使い、そうでない単体のイベントなら at を使う。

at で訳される事例

2016_4_12 甘利氏は1月の辞任時の記者会見で、弁護士らによる事実関係の調査を継続したうえ、その結果について「しかるべきタイミングで公表する」と明言していた。

At a January press conference where Amari announced his resignation as a state minister, he pledged he would have lawyers and others investigate all the facts and would “make public at an appropriate time” the findings of the investigation.

in で訳される事例

2016_6_3 首相は、消費増税延期が「公約違反」との批判を受け入れ、「新しい判断」について参院選で「国民の信を問う」と強調した。

Acknowledging criticism after breaking a campaign pledge when he postponed the consumption tax hike, Abe has emphasized that he would “seek the people’s mandate” on his new decision in the upper house election.

during で訳される事例

2016_4_17 ラブロフ氏は来日前、一部メディアに対し、1956年の日ソ共同宣言について「平和条約交渉で領土問題を検討するとは書かれていない」などと主張した。

In an interview with certain media ahead of his visit to Japan, Lavrov said the 1956 Japan-Soviet Joint Declaration does not say that the territorial dispute will be

discussed during negotiations on the envisioned peace treaty.

(3)「デは最終手段としての格助詞(他の格助詞が当てはまらないものは全部デで表す)」である。

副詞的とは言えないデ格の例とその Google 翻訳出力(G) (2018/12/30)

彼らは太郎が一万円支払うことで納得した。

G: They were convinced that Taro would pay 10,000 yen. {正 / 誤}

正解: They agreed that Taro would pay 10,000 yen.

罰金を一万円とすることで決まった。

G: It was decided by setting the penalty to 10,000 yen. {誤 / 誤}

正解: It was decided to make the penalty 10,000 yen.

私はそれを選ばなかったことで後悔した。

G: I regret not having chosen it. {正 / 正}

太郎は花子に新規事業のことで電話した。

G: Taro called Hanako for a new business. {誤 / 正}

正解: Taro called Hanako about the new business.

太郎は花子に / をお金のことで安心させた。

G: Taro reassured Hanako for / with money. {誤 / 正}

正解: Taro reassured Hanako about the money issue.

副詞的とは言えないデ格のまとめ

- ・「ことで」という形で安定するようである
- ・「ことを」という言い換えを許容する場合もある(「合意する」「納得する」等)
- ・意味的には [内容] というラベルが可能である
- ・デ格が節である場合には, Google 翻訳は概ね正解するが, [手段]と誤訳する場合もある
- ・デ格が名詞句である場合には about で訳出するのが安全であるが, Google 翻訳は一貫して for を使って誤訳するようである

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 加藤 鉦三, Sean Collin Mehmet	4. 巻 13
2. 論文標題 「デ格デキゴト名詞による時間表現 : デ格の意識・逐語訳ダブル対訳コーパス」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『信州大学総合人間科学研究』	6. 最初と最後の頁 33-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 加藤 鉦三, Sean Collin Mehmet
2. 発表標題 最終手段の格マーカーとしてのデ
3. 学会等名 言語処理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤 鉦三・Sean Collin Mehmet
2. 発表標題 デ格デキゴト名詞による時間表現 デ格の意識・逐語訳ダブル対訳コーパス
3. 学会等名 言語処理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加藤 鉦三・Sean Collin Mehmet
2. 発表標題 英語らしさと日本語らしさに関する言語学的予備研究
3. 学会等名 日本英文学会中部支部第68回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 加藤 鉦三・Sean Collin Mehmet
2. 発表標題 デ格の意識・逐語訳ダブル対訳コーパス 主語化の場合
3. 学会等名 言語処理学会第23回年次大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	花崎 一夫 (Hanazaki Kazuo) (40319009)	信州大学・学術研究院総合人間科学系・准教授 (13601)	
研究分担者	Mehmet Sean (Sean Mehmet) (90751628)	松本大学・教育学部・准教授 (33604)	